

自選 五十首

永田 紅
Koh Nagata



〔ながた・こう〕一九七五（昭和五十）年、滋賀県生まれ。十二歳の終わりに塔短歌会に入会し、作歌を始める。学生時代には京大短歌会でも活動した。一九九七年、「風の昼」により第八回歌壇賞受賞。二〇〇一年、「日輪」により第四十五回現代歌人協会賞受賞。農学博士。

人はみな馴れぬ齢を生きているユリカモメ飛ぶまるき曇天

〔日輪〕（平成12年）

どのような大ききであれ暗闇に火を見る時に火は眠かりき

感覚は枯れてゆくから 明日君にシマトネリコの木をおしえよう

川のない橋は奇妙な明るさで失うことを教えてくれる

ねこじゃらしやがて枯れなむもわずつと孤りの君を見ていたのです

ああ君が遠いよ月夜 下敷きを挟んだままのノート硬くて

輪郭がまた痩せていた 水匂う出町柳に君が立ちいる

どこに行けば君に会えるということがない風の昼橋が眩しい

眼が覚めてもう会えないと気づく でも誰のしずかな鎖骨だったか

対岸をつまづきながらゆく君の遠い片手に触りたかった

らいらつくりらりららよ俯けば兄に似たると言ってしまった

関係は日光や月光を溜めるうちふいに壊れるものかもしれぬ

あらわなる肘より先を差し入れてあなたの無菌操作うつくし

過ぎてみればいつも幼く楠の影斑のなかに素足並べる



プールには雨降りながら雨にのみ体は濡れてゆくこちする

換気扇戸外の風の勢いにまわりたり空がちらちらと見ゆ

測量士しずかなるゆえ対岸は遠のいてゆくものようなり

ほうたるのひかり追いつつ聞くときにルシフェラーゼは女の名前

下敷きの青さ加減を日に透かすコスモス上下に揺れている午後（初期歌篇）

久々に開きし本の少年は既に我より年下なりき

ああそがか日照雨のように日々はあるつねに誰かが誰かを好きで
 「北部キャンパスの日々」(平成14年)

週一度洗う白衣のゴムの袖すぼまるかたちのまま汚れたる

群像は百万遍をながれゆきとどまる側がもつともさびし

一月は君にまつわる青空のしんしんとして鳶がまわる

スリッパの音で誰だか分かりつつ保存してから振り向きにけり

ヤドリギは木の結び目となりにしを淡く凝りてやさしくありぬ

話さねば 白衣のまま追いかける時間が君を遠ざけるまえに

どこへ向けて歩いていてもああ君は引き返そうとは言わなかったね

私をおそれずにいよ連翹の芽吹きに君を追いつめはしない

菜の花は中州にほそくあふれたりいろいろなき余裕が大事

植物の名前を知らぬ君のため雨降る中を連れ出してゆく

判断はしろくかぎりもなく正し感情はのちにどうにかするもの

歌を作り始めたとき、コクヨの原稿用紙を一冊もらった。そのころは両親もまだ手書きで原稿を書くことが多かったので、家には原稿用紙が何冊も積んであり、その中から角のとがった新しい一冊を自分用におろしてもらったことが嬉しかった。緑色の表紙に、父がマジックで大きく「紅」と書いたものが、私の初めての短歌のノートになった。

ページの間には、歌の断片を走り書きした学校の授業プリントなども挟み込んでゆくから、ぶわっと膨らんでくる。あちこち紙がはみ出し、背表紙もゆるみ、着膨れたような格好になった最初のその一冊は、今も実家のどこかに残っているはずだ。

九九年から二〇〇〇年にかけて、月刊誌「歌壇」に一日一首以上を載るといふ「日付のある歌 北部キャンパスの日々」の連載をしたころには、すっかりパソコンで歌を作るようになっていた。連載のために日記用のファイルを作り、日々の出来事をメモし、一首になりきっていない言葉も打ち込んだ。ただの記録とも歌稿とも異なる、独特の実感のあるそのファイルは、歌の背後の事情を

思いきることと思いを切ることの立葵までそばにいさせて

癖はただ注意して見る者に見ゆ片手で壁を弾きつつゆく

コスモスのほそく群れさく陽のなかでこの世のふしぎな時間と言えり

この町の君にまつわる場所たちを園丁のように見まわるだろう「ほんやりしているうちに」(平成19年)

試験管のアルミの蓋をぶちまけて じゃん・ばるじゃんと洗う週末

亡き人の声を頭の中で聞く私の中より出ることもなく

あいまいに遠のきしゆえ君の部屋をまだあるもののようにも思う

背景に川が流れて学生時代を夢のようだと言うのだろうか

抗体用のウサギに草を食ませいき戻らぬ日々とはこういうことだ

忙しきほうが時間のあるほうをさびしくさせて葉を雀らしむ

木の下をくぐりゆくとき撓る枝を押さえてしばし手は待ちくるる

疎林には光の逃げ場なきゆえにまぶしきものがぶつかり合えり

やれやれ、と僕は思った。ほんやりと村上春樹の文体に寄る

眩しがる我にカーテン閉めくれし数秒のことしきりに思わる

一本の廊下が西陽におぼれそう人は白衣のまままぎれそう

うつくしき胸鎖乳突筋をもて人はいくどか振り返りたり

俺という言葉うれしく聞きいたり食事のときに一度言いきける

第三版でわれは学びぬ旧版となりても夏には昼顔が咲く

含んでいて、今読み返してみたならおそろしく懐かしくて恥ずかしいものだろうが、パソコンが数年前に壊れてもう見ることが出来ない。保存しておいた二十四、五歳の時間を、間違っってゴミに出してしまったような残念な気がしたが、それはそれでまたいいのだとも思う。歌を作った本人が背後の細部を忘れたとしても、歌そのものがその時の風のおいまで吸収してくれているだろう。

第三歌集「ほんやりしているうちに」は、自分でも笑ってしまうような力の抜けたタイトルである。けれど、二十代後半から三十代はじめの空気として、なんだかしっくりきたのだった。あまり格好をつけたくなかったということもある。逃したもののばかりを悔やんだり、焦ったりしがちであった時期だったけれど、時間の流れは、もっと豊かなものなのかもしれないと思うようになった。